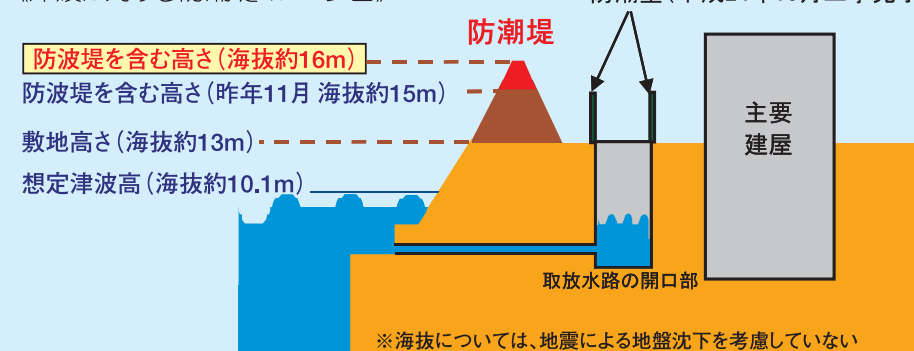


防潮堤の本体工事が完了しました

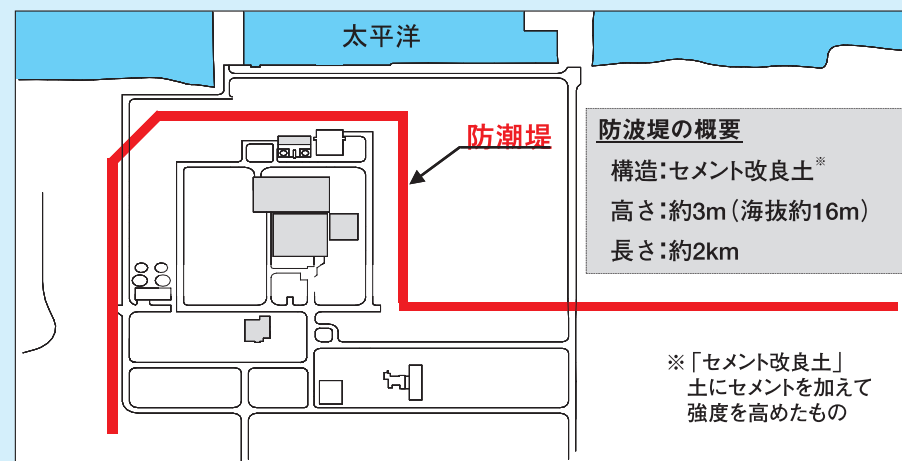
東通原子力発電所では、東京電力福島第一原子力発電所の事故を踏まえた緊急安全対策の一つとして、平成24年3月より防潮堤(高さ約3m、海拔約16m)の設置工事を進めてまいりました。このうち、高さ約2m分については、昨年11月までに工事を完了していましたが、平成25年5月29日、残る高さ約1m分の工事が完了しました。

当発電所で想定される津波高は、最大で約10.1mと評価^{*}しており、津波が敷地高(海拔約13m)を越えることはないと考えておりますが、防潮堤の本体工事完了により、安全性がさらに向上しました。

《津波に対する防潮堤イメージ図》



《防潮堤配置図》



※想定津波高(10.1m)について

東北地方太平洋沖地震の知見を踏まえ、太平洋の北海道から東通原子力発電所の敷地の沖合にかけて4つの断層モデルを想定し、これらが連動した場合の最大の津波高を評価しました。

今後も新たな知見を収集しつつ、国が作成している新規制基準の動向も踏まえ、発電所の安全性確保に万全を期してまいります。



防潮堤(海拔約4m地点から撮影)

防潮堤工事の変遷
(海拔約13m地点より撮影)



平成24年11月 約2m部分の工事完了



平成25年5月 本体工事完了

※法面の保護工事等の付帯工事は、引き続き実施してまいります。

さらなる安全性向上対策の実施について

東通原子力発電所は、既に福島第一原子力発電所と同様な事故を起こさない安全レベルを確保したものと考えておりますが、さらなる安全性向上を図るため、「フィルター付格納容器ベント設備」および「免震重要棟」を設置することとしております。

これらの設備の仕様が固まったことから、今後、工事を進めてまいります。

フィルター付格納容器ベント設備

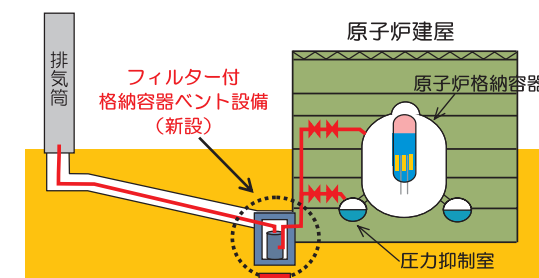
原子炉格納容器の過度な圧力上昇に伴う破損を防止するために、格納容器内の蒸気を大気中に放出して圧力を低減させる際、万一、炉心が損傷した場合においても、フィルターを介して放射性物質の放出量を大幅に抑制する設備。

- 完成時期 平成27年3月(予定)
- 設置場所 地下ピット(埋設深さ約40m)
- 設置数 1基
- 特徴・機能

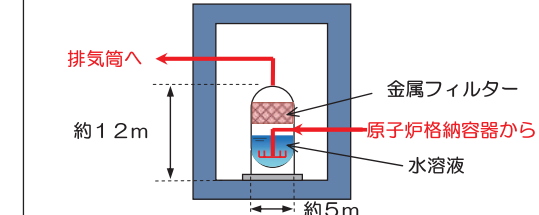
- 万一の放射性物質の放出を直接放出時に比べ1/1000以下に抑制。既設のウェットウェルベント^{*}との組み合わせでさらに抑制。

※原子炉格納容器内の蒸気を圧力抑制室のプールを通過させ放射性物質を除去して放出すること。

《断面イメージ》



《拡大》



免震重要棟

大規模な原子力災害が発生した場合の現地対策本部となる指揮所機能をより強化するための免震構造の建物。

- 完成時期 平成28年3月(予定)
- 建物構造 免震構造、地上3階、延床面積約4200㎡
- 収容人数 約1000人(災害時対応人数約260人)
- 設置場所 原子炉建屋から約800m離れた高台(海拔約30m)

○特徴・機能

- テレビ会議システムや通信設備等を配備した会議室
- 専用の非常用発電機
- 放射線遮へいを考慮した空調設備
- 災害時の対策要員が、外部支援なしで少なくとも1週間の現場指揮等が可能

《完成イメージ》



《免震構造の特徴》

